


俺たちはいわゆる冒険者。  
戦士、魔法使い、盗賊の3人組で、  
ここ何年か一緒に組んで仕事をしている。

\*体験版のサイズは860× 600と、少し小さめになっています。  
(製品版のサイズは1720× 1200です)






冒険者ってのは…そうだな  
どんな仕事かっていうと…

例えばダンジョンを探索してお宝を探したり、  
人が行かない危険な場所を調査したり、  
モンスターを倒して皮とか角とか牙とかレアな素材を手に入れたり…  
まあ文字通り冒険することを生業とする職業なんだが、  
特に行く所が無いときは街に滞在して  
人々の依頼をこなして生活していたりもする。  
ぶっちゃけ雑用係とか何でも屋とか、そういうこともするわけだが。

そんなの冒険じゃないって？  
しょうがないだろ？  
冒険だけじゃ食っていけないんだ。  
特に俺たちみたいな駆け出し冒険者はな。

まあたまにケンカや仲違いもするけど、  
割と上手くいっているパーティーなんじゃないかな。





ちなみに俺はシーフ。  
盗賊だ。

つってもちゃんとギルドに加入してる盗賊だ。  
犯罪者と一緒にするなよな。  
罫外しや扉の鍵開け、戦闘では弓矢や短剣でサポートしている。  
バックアタックでの奇襲も得意なんだぜ。



An anime-style illustration featuring three characters. On the left, a character with long, flowing white hair and a grey cloak holds a long wooden staff. In the center, a character with a red and white helmet, a brown cape, and white armor with red accents stands with a serious expression. On the right, a character with brown hair, a green scarf, and a black crop top looks down. The background shows a city with classical architecture under a blue sky with clouds.


こいつはファイター。  
頑丈さとデカさが自慢の戦士だ。  
戦闘はヨイツにお任せだな。





そしてこいつはソーサラ。魔法使いだ。  
頭はいいが体力は無い。  
俺みたいな素早さもないから  
モンスターに殴られれば即吹き飛ばような脆さだ。  
でも攻撃魔法と幻影魔法が得意で、  
コイツの魔法にはよく助けられているよ。





いいコンビとはいえ  
まだまだうだつのあがらない駆け出し冒険者。  
素材集めとか雑用係とか、地味な仕事ばかりの  
しみttたれた生活を送っていた。  
そしてあの日も、俺たちは寂しい懷を何とかするために、  
冒険者ギルドに仕事を探しに行ったワケなんだが――



「護衛任務…?」  
「そ、護衛任務。  
難しい仕事じゃないわヨ。やれるでしょ?」





そう話すのは冒険者ギルド(兼酒場)の受付、  
俺たちは親しみを込めて「おかみさん」って呼んでいる。  
世話好きで親しみやすい、そのおかみさんは、  
その気風の良さで冒険者の間では中々の人気者だ。







まあ俺たちは仕事を斡旋して貰っている立場で、  
頭の上がない相手なワケなんだが。  
『そりやまあ  
やれと言われれば犯罪以外何でもするのが冒険者だ。  
やるよ。やるけど…』  
チラ。  
俺はその護衛対象の人物に目をやる。





そこには白いフードで顔を隠した女性。  
一言もしゃべらずじっとこちらの様子を伺っている。

「ワケありの人物じゃないだろうな」  
「ワケありと言えばワケありだけど…」  
「言っとくが犯罪に加担するのはゴメンだからな」  
「やあねえ、ウチは国に認められてる冒険者ギルドよ？  
まっとうな仕事しか扱ってないってば。」  
「ふーん」

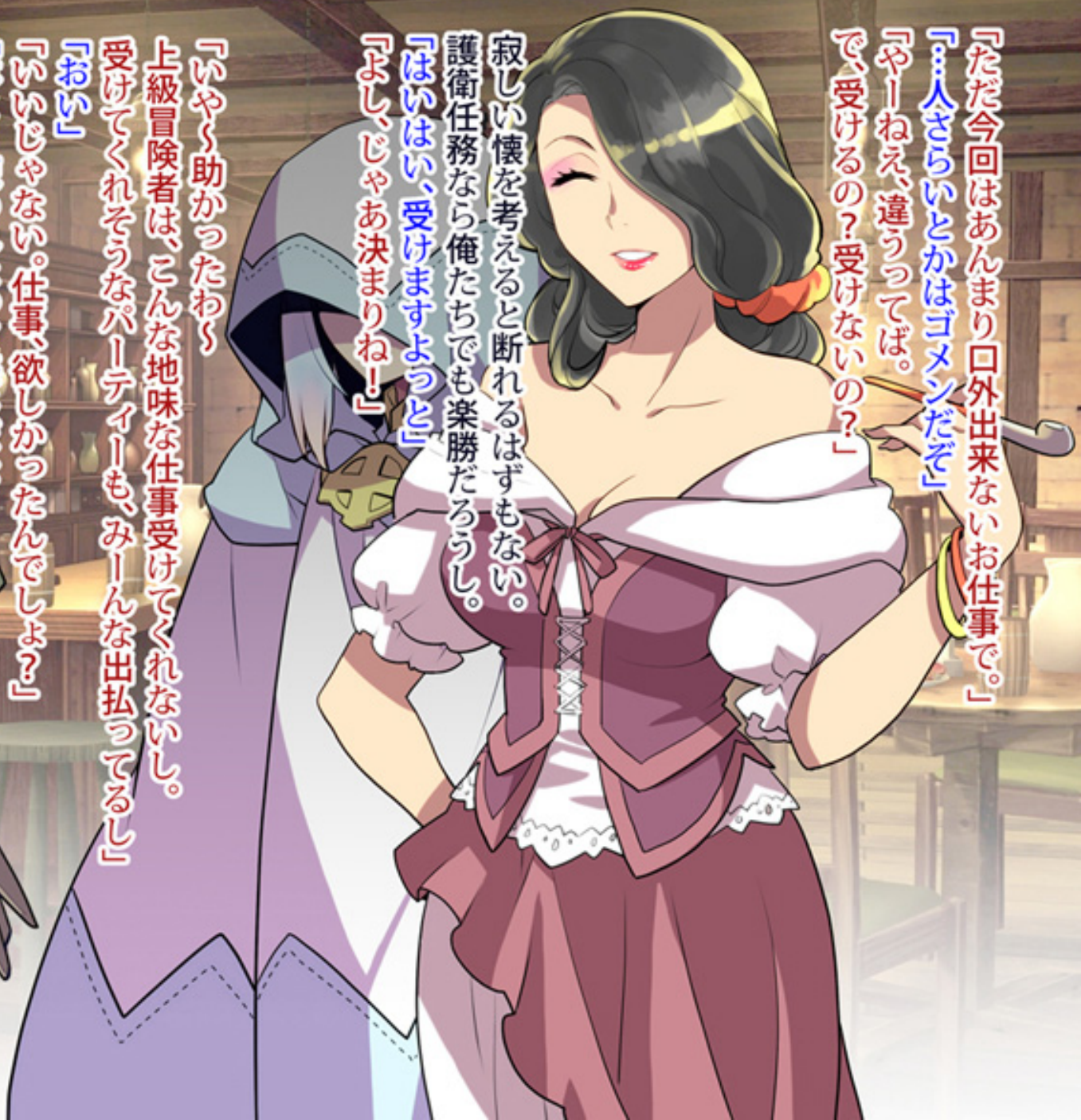




「ただ今回はあんまり口外出来ないお仕事で。」  
「…人さらいとかはゴメンだぞ」  
「やーねえ、違うってば。」  
で、受けるの？ 受けないの？」

寂しい懷を考えると断れるはずもない。  
護衛任務なら俺たちでも楽勝だろうし。  
「はいはい、受けますよ」と  
「よし、じゃあ決まりね！」

「いや、助かったわ」  
上級冒険者は、こんな地味な仕事受けてくれないし。  
受けてくれそうなパーティーも、みーんな出払ってるし」  
「おい」  
「いいじゃない。仕事、欲しかったんでしょ？」  
「体よく使われたって感じだな…」  
まあいいけど」





「あの」

お。  
しゃべった。

「私……アリアーナと申します。

護衛任務を受けて頂きありがとうございます」

アリアーナと名乗った女性は、そっと顔にかかったフードを取る。





おお…これは中々：  
真っ白な肌に銀の髪、涼しげな青い瞳。  
まだあどけなさが残るが、  
今まで見てきた中でも結構な美人。  
こんな女性がいたのなら噂になっているもんだが、  
はて…





情報通の俺でさえ知らないとはどういうことだ。  
さては深窓の令嬢…はたまた箱入り娘的な…

「うーん…?」

「ま、知らなくて当然でしょ。」

この方はね、教会の中でそれはそれは大切に育てられてきた  
聖女サマなんだから。」

「聖女様!?!」

「ぞ、聖女アリアーナ様よ」

「や、やめてください、聖女様だなんて…」

アリアーナ…いえ、

できればアリアとお呼びください」

アリアと名乗る少女は照れた表情で笑う。  
おお、笑った顔も可愛いな。  
「そこ、デレデレしない」



「で、彼女を隣国までの護衛するのが貴方たちのお仕事。」  
「オイオイオイ、聖女様の護衛って、俺たちがか？」  
「いいのかよ、一介の冒険者にそんな大切な仕事を。」

「いいも何も。聖女様からのご指名なのよ。  
冒険者に護衛をお願いしたいって。」  
「へ？」





「それと、このお仕事は内密の案件だから。秘密裏に国を出て、人目に着く街道は避けて、隣国に入る時も気付かれずにね。よろしく。」  
「それってどういう…」

「だって大切な大切な聖女様よ？  
冒険者の護衛のみで旅をするなんて知れたら、盗賊や山賊の格好的になるからじゃない。」  
「た、たしかに」

ん？ちよつとまってよ？

「だったら最初っから軍隊でも何でも連れて護衛すりゃいいんじゃないのか？  
大切な聖女様なんだから？」

「バカね。いくら聖女様って言っても人ひとりに国がそんな大掛かりなことできるわけないでしょ。  
それにせつかくの聖女様の直々の御指名なんだから。つべこべ言わず  
ありがた〜く受け取っておきなさい。」  
「ぬう…」



「いいこと？まず大切なのは聖女様の身の安全。  
そして無事に隣国に連れて行くこと。  
無事に仕事をこなせたら破格の報酬なんだから、しっかりね」

破格の報酬。  
そう言われれば断れるわけもない。  
俺たちはよく分からないその仕事を二つ返事で請け負った。







その判断が後々大変なことになるとも知らずに。



「よし、こちらへんでいいかな。  
ソーサラー、もういいぞ。幻影魔法を解いてくれ。」  
「うむ。」





シュワワワワ…  
幻影魔法が解かれ、彼女、  
聖女アリアーナの姿が現れる。





「ありがとうございます。無事に街の外に出られたようですね。」  
ニコリ。

おお、聖女様の微笑みは破壊力スゲエなあ。  
こりやずつと姿を隠してして貰ってた方が  
俺たちのためじゃないか？

ついデレデレしそうな俺をしり目に

「礼はいい。聖女様の護衛は俺たちの仕事だ。」

と、愛想のないソーサラーの返事。

お前なあ、そこはもうちよつとなあ。





それにしても。

「あの…聖女様  
その格好は一体…」

「え、  
おかしいですか？」  
おかしいというか何というか…





「冒険者っぽい格好をしてみたのですが…」  
冒険者っぽい…？

明らかに。

露出度が高い。

ピンポイントに肌が露わになっているし。

胸とか太ももとか

チラチラ見えてるんですけど。

一体どこで誰にこんな格好を教えてもらったのやら…





「今まで読んできた本を読んで参考にしたいのですが…  
変…でしょうか…」

「本…？」

「はい。本、です」

一体どんな本を参考にしたいのか。





「実は私、冒険者に憧れていて」  
「冒険者に？」  
「はい。」

「私、生まれてからずっと教会の中で過ごしてきたんです。  
聖女という存在は全ての穢れから離れた場所で、清らかに生き、  
祈りを捧げるためにその人生全てを捧げなければならぬと。」  
「うわぁ…そいつは大変だ」







「寂しくはありませんでした。  
私の暮らしはいつも神様と共にありましたから」

「神様ねえ」

「私はもともと身寄りのない孤児で

教会はそんな私を育ててくれました。

そして私もその期待に応えるべく聖女として生きようと…

私にとって教会が世界の全てで、

神に祈りを捧げることが生きることの全てだったのです。」

「…でも外の世界のことを知りたくて…」

「ほう」



「シスターが差し入れてくれた書物を読んでいるうちに自由に外の世界を旅して、色んな場所に行ける冒険者というものに憧れて、その人たちが羨ましくて…」

「だから今回、外に出られる機会に、せっかくだから冒険者さんに護衛をお願いしようとワガママを聞いて貰ったのです。」

「冒険者が羨ましいねえ…」

「冒険ってのは何も楽しいことばかりじゃないぞ。」

「危険なモンスターと戦ったり、時には怪我をすることもある。」

「うむうむ」

「私、癒しの力なら使えます！」

「戦闘の時には怪我を治すこともできます！」

「決して足手まといにはなりません！」

「はは。まあその時にはよろしく頼むよ。」





そして  
その機会は割と早くやってきた。

人知れず旅をするために街道沿いは歩けない。  
そして街道を離れた山道は危険なモンスターがウヨウヨだ。  
たちまちモンスターとエンカウトする。  
だがそんなことには慣れっこの俺たちだ。  
いつものチームワークでモンスターを薙ぎ払う。

「お手伝いします!!」





「ブースト！」

おお、攻撃力up魔法か。  
こりゃスゴイ。







「ホーリーウェポン！」

なるほど。  
これは武器に聖なる力を付与する魔法か。





「オールヒール！」

極めつけに全体回復魔法。  
確かにこれはすごいな。  
足手まといどころじゃないぞ。



「ほう…中々やるな」

「戦闘すごくラクだったぞ。助かる。」

「だよな。さすが聖女サマだぜ」

「そんな…」

「この力だったら冒険者稼業も十分イケそうだ」

「いつそのこと聖女様から冒険者に転職したらどうだ？」

「なーんてな。ハハハ」

「そうですか？ウフフ…お世辞でも嬉しいです」

「いやぁお世辞じゃなくて、なあ？」

「ウム。」

「美人で回復魔法使いの達人ともなれば

引く手あまたといったところだな」

実際。

こんな若くて可愛い、しかも回復魔法の達人ともなれば、

誰もが放っておかないだろう。

そりゃそうだ。

もし彼女が聖女じゃなく、一介の冒険者だったら…

俺だって放っておかないさ。

といっても。

相手は聖女。

しかも護衛対象だ。

勿論手を出すなんてことはできない。

(聖女なんだし、きっと処女なんだろうなあ)

(誰にも触れられたことのない清らかな身体…)

くうっ、そんな身体を好きに出来たら最高なんだが

男なら誰でも考えるであろう妄想をあれこれ考えムラムラしつつ、

俺たちは目的地向かって歩みを進めた。



「まあ、素敵な泉!」

「ああ、ここは俺たちだけが知ってる穴場なんだ。

長旅で疲れているだろうし、今夜はここでキャンプを貼るから、  
良かったら水浴びをするといい。」

「いいのですか?」

「俺たちはあっちの方で見張りをしているから、安心してくれ」

「え? 皆さんもご一緒しないのですか?」  
「は?」





「いえ、だから一緒に水浴びを」  
「ば、ばか言っちゃいけない！  
そんなことするはず！」

「あら、そうなのですか？」

「こんなに気持良さそうなのに」

「いやいやいや、

俺たちは後でゆっくり入るから、なあ？」

コクコク。

「じゃあそういうことでー！」

と、アリアを残してそそくさと立ち去る俺たち。





そして少し離れた場所で。

「もしかして」

「もしかしくなくても」

「男を危ないものだ認識していないのでは？」

「教会から一歩も出たことがないと言っていたな」

「傍にいたのはシスターと聖女だけでも言っていた」

「教会に男はいなかったということか？」

「なあ、もし男女の性について何も知らないとしたら」

「シスターとやらに教わっていないとしたら」

「どうかそのシスターも経験が無かったとしたら」

「性知識がまるで無いってことに」

「そっやって俺たちが話している最中――」

「ぎゃっ!」

突然の悲鳴。

「まさかモンスターが!？」

即座に駆けつける俺たち。

「大丈夫か……うっ」



目の前には全裸のアリア。  
ポタポタと裸体から滴が垂れる。



白い肌。  
まるやかな二つのふくらみ。  
ゆるやかな曲線を描く腹から股間へのライン。



「やだ、ごめんなさい、驚かせてしまって。  
ちよっと足を滑らせたただけなんです」  
大切な部分を隠そうともせず謝るアリア。  
俺たちの目はその裸体に釘付けで。

（エロイ…）  
（女の胸…）  
（裸…）

「あの…？」  
言葉をなくしている俺たちのことを  
不思議な顔をして見つめるアリア。





「あー！  
やっぱり一緒に水浴びしたいんですね？  
どうぞどうぞ！」  
「い、いや、俺たちは…」  
「う、うむ、後でいい」  
「ど、どつどつゆっくら…」

「冗談じゃない。  
これ以上ここに長居したら股間の怪物が火を噴いてしまう。  
俺たちは無言で目くばせをして、そそくさとその場を立ち去った。  
股間を抑えつつ。」





「あれはやっぱり」  
「うむ」

「教えて貰ってないな」  
「裸を見られても恥ずかしがらないなんて」  
「男というものをまるで知らないのでは」  
「しかし…」  
「ああ」

「…オッパイでかかったな」  
「乳輪ピンクだった」  
「尻が…尻が…」

「…」  
「…」  
「…」





「ちょっと抜いてくる」

「私も」

「それがし  
某も」

俺たちは目を合わせ、それぞれ「用を足しに」行った。



翌朝。

「お早うございます。いい天気ですね。」  
まぶしいくらいの笑顔。

「お、おはよう……」

「こういうの冒険日和って言うんでしょうか。」

「あ、ああ」

「そ、そうだな」

昨日俺たちに裸を見られたというのに、  
このまるで気にしていない態度。  
こちらとお前さんの裸をオカズに昨晚はしこたま抜いたというのに。





「？」  
皆さんどうされましたか？」

ギク。

「少し目が赤いようですが…寝不足ですか？」

「いや、だ、大丈夫。何でもない」

「そ、それより、ほら、せっかくのいい天気だ！

今日もたくさん歩くからしっかりな！」

「はい！護衛、どうぞよろしくお願いします」

「あー…じゃあ、今日は俺がしんがりに付こうかな」

「おう、任せた」

冒険者の心得として、

守るべきものは後ろではなく、真ん中に、という基本ルールがある。

それはもちろん、不意打ちやバックアタックなるものから

護衛対象を守るという意味合いがあるのだが。





しかし…今日は何だか…

(尻が気になる…)

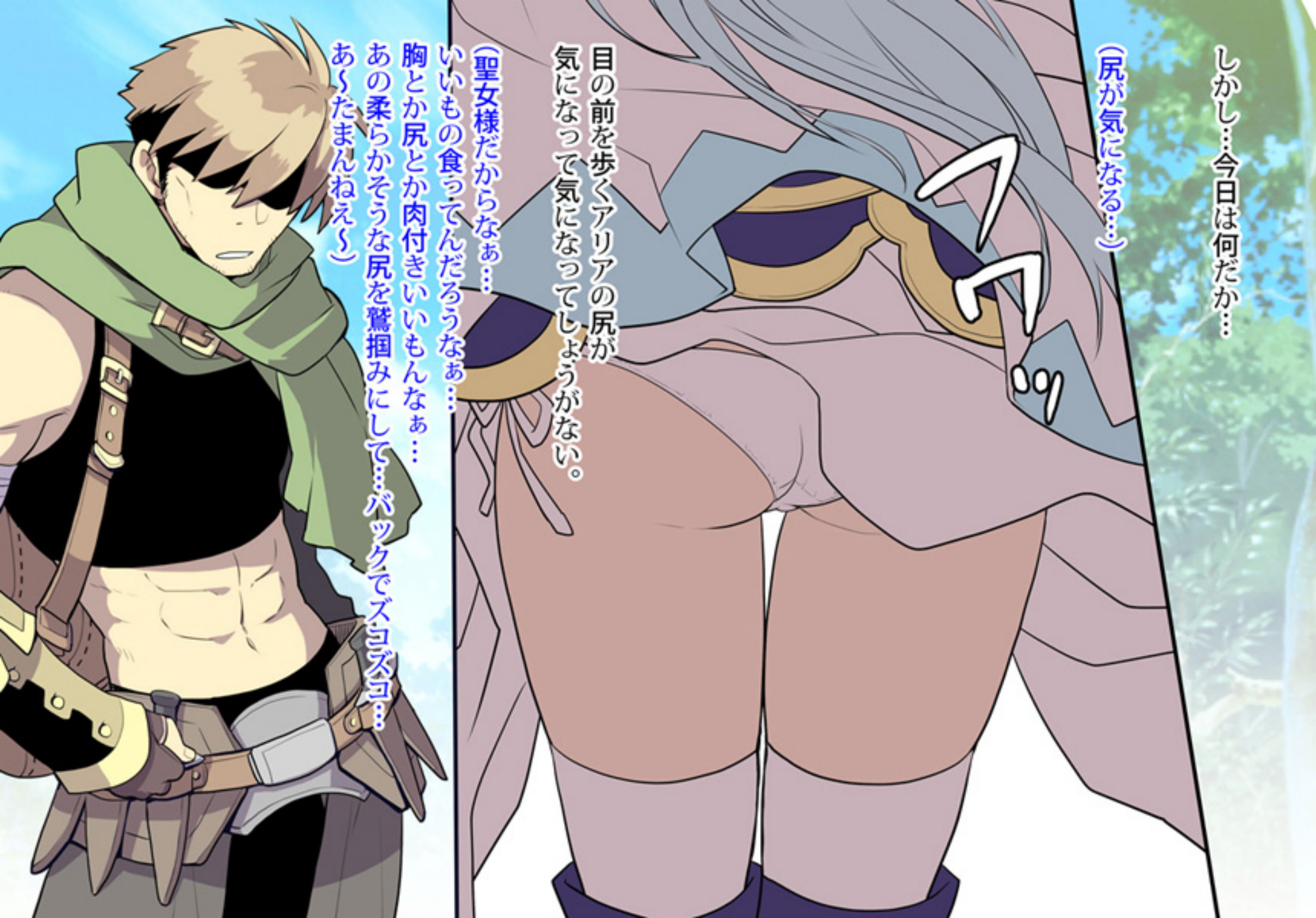
目の前を歩くアリアの尻が  
気になって気になってしょうがない。

(聖女様だからなあ…)

いいもの食ってんだるうなあ…

胸とか尻とか肉付きいいもんなあ…

あの柔らかそうな尻を鷺掴みにして…バックでズコズコ…  
あゝたまんねえ…



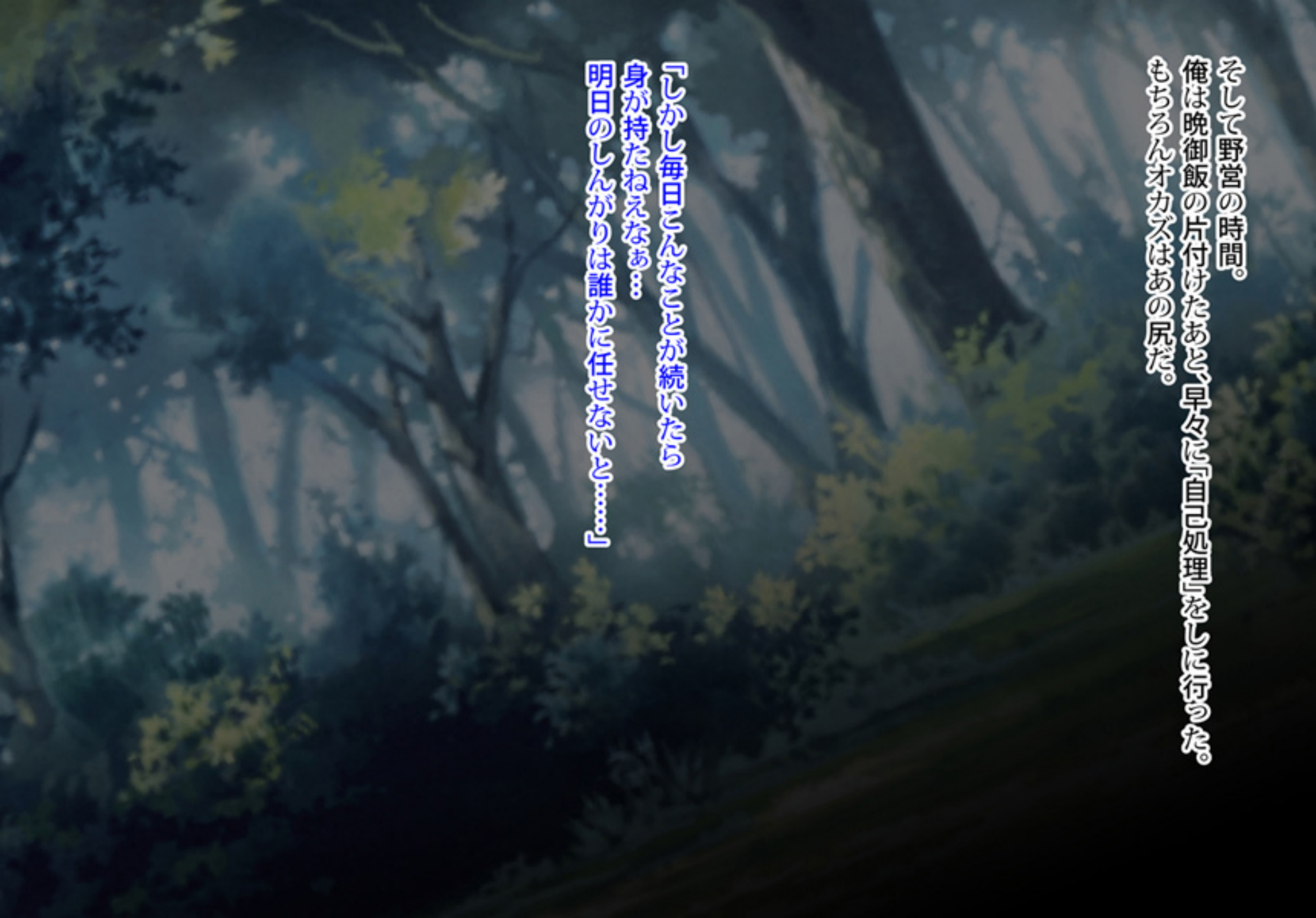


聖女様に対して欲情するなんて  
すごく罰当たりだろうが、  
妄想だけなら神様も許してくれるだろう。

その日一日護衛任務も上の空。  
俺はずっとムラムラしっぱなしだった。







そして野宮の時間。  
俺は晩御飯の片付けたあと、早々に「自己処理」をしに行った。  
もちろんオカズはあの尻だ。

「しかし毎日こんなことが続いたら  
身が持たねえなあ……  
明日のしんがりは誰かに任せないと……」



「あの…」

「……………」

「帰りが遅いので心配になって」

「あ、あ、これは、その」

やべえ。  
見られた。

いつもだったら人の気配に敏感なはずのこの俺が。  
こんなに近づかれてるのに気付かなかった。  
右手に集中していたためか。





「まあ」

アリアは俺のナニを凝視している。  
俺の右手が先程までシゴいていたナニを。  
血液が集まって固く、大きくなった、赤黒いソレを。  
見られた。  
パツチリ見られてしまった。

これはヤバイ。  
死ねる。  
死ぬくらい恥ずかしいぞ。  
よし、死のう。





「大変！そんなに腫れ上がって！  
具合が悪いなら悪いと早く教えてください！  
へ？」

「待ってくださいね！すぐに治癒魔法を……！」  
「ま、まったまった、これはそうじゃなくて」  
「違うの……ですか？」

待て待て俺！相手は何か勘違いしているみたいだぞ。  
正直に話して恥をかいでどうする！？  
いやしかし、聖女に嘘をつくなんて――





「これは、そう、毒ですー毒出しをしていたのです!!」  
キツパリ

うーん、この。  
嘘にしても、もうちょっとマシな嘘をだな。

「毒!? 大変!」  
すぐに解毒魔法を……!

マジか、信じたぞ!!





よし、このまま押し切れれば…

「いやいやいや、それには及びません。」

これは男性特有の生理現象みたいなものですから。」

「男性特有の…」

「そうですそうです！」

男性というのは疲労するとこういうところに毒がたまります。  
だからこうして擦ることによって毒抜きをしないとですね…」

うーん適當すぎる。

我ながらものすごくいい加減な誤魔化しようだ。

まさかこんなことを信じる奴なんて——





だが人を疑うということを知らない聖女様は、  
いとも簡単に信じてしまった。

「擦るのですか？」

「え」

「擦ればいいのですね？」

「あれ？」

「病気や怪我を直し、人々から苦しみを取り除くのは  
聖女たる私の役目。どうかお任せください！」

「え、でも、しかし」





俺が躊躇しているあいだにも  
アリアは手を伸ばし、それを上下に擦り始めた。  
「こう、ですね？」

「っはっは」





なんだこれは！

聖女は何をしているんだ!!

俺のイチモツを握って何をしているんだ!!

その柔らかい指で、

聖女の穢れなき白い、細い一本二本の指が、

俺の、ナニを。

その混乱と下半身に与えられる快感から、

俺の身体は固まってしまった。

そんな俺の混乱をよそに

「どうですか？**痛い**ですか？**大丈夫**ですか？」

聖女様は真剣な顔をして聞いてくる。





「あ、う、だいじょうぶです。そのまま、続けて」

これは背徳感、というのか、  
聖女様の綺麗な指を汚すというその行為に。  
俺は。

それに興奮した。  
でもどうせなら  
もっと。

「で、できれば、その口で  
吸いだして貰えば、もっと」

おいおいおい。  
まさかその口まで汚そうというのか。  
いや、流石にそれは。





「はい。  
こう…ですか？」  
ちゅぷ。  
くちゅっむりゅ。

ああああああ！  
なんてことだ！  
聖女様が！  
俺のチンコに回を付けてー！！  
吸いだそうとチュウチュウしているなんて！！  
ヤバイ、ヤバイすぎるー！





しかしこうなったらもう止まらない。

「できれば指で先っちょのどころを、こう、絞るようにグニグニして、あっ、そうですそうです、そして穴の所を舌先でつつくように、おっ、おっふ、すごく、いいです」

「んっ、むちゅ、ふちゅ、れる、れる」

やばい、出る、聖女様の顔に、俺の、汚い汁が、汁を、顔に、聖女様の綺麗な顔に、出す、出したい、いや、しかし  
ああああああああああ





どぶ  
びゅぶ、びゅるっびゅるるるっ  
俺はその欲望に抗えなかった。





気が付けば聖女の、アリアの顔に、  
思いつきり精液をぶっかけていた。

「あ、あ」

「あっ……」

「すみませんすみません……!」

我に返って後悔と恥ずかしさで謝り倒す俺。

「良かった、  
毒、ちゃんと出せました!」

そんなこととは関係なく無邪気に喜ぶアリア。

なんてことをしてしまったんだ、俺は。

バカバカ、俺のバカ……!





「？  
どうして謝るのですか？  
私は当たり前前のことをしたままですが…」  
「いや、それは、その、何というか、実は」

「病気や怪我は恥ずかしいことではありません。  
ましてや私は貴方たちに身を守って貰っている立場。  
せめてものご恩返しと思ってください。」  
俺が言った嘘八百を信じ切っている…  
これは、もう…





「騙しとおずしかなら」





「いえ、毒とはいええ、本来なら自分で処理しなければならいことです。人を頼らなければいけないかったことは恥ずかしいことなので。」  
(キリッ)

「そうなのですか？」

「すみません、出しゃばったマネをしてしまって…」

「い、いえ！ 気持ち良かつ…(モゴ)」

いえ、おかげで助かりました。

しかしながらこのことは二人だけの秘密に」

「秘密に…ですか？」

「そうです、男として、いえ、冒険者として、皆に知られるのは恥ずかしいことなので。」

「そうなの…ですね。わかりました。誰にもしゃべりません。」

「ま、まあできれば」

これからも毒出しの時は手伝って貰えると…嬉しいかも…

な—んて(ボリボリ)」

「はい、勿論です！ 治療させてください！」

ニゴリ。





人を疑うことを知らない、屈託のない笑顔。  
その頬をトロリとした白いアレが流れ落ちる。  
穢れ無き清らかなものを汚してしまっただという罪悪感。  
それよりも  
まるで降り積もった白い雪を泥の着いた靴で踏み荒らしたような  
そんな背徳感の方が勝って――





俺のナニが、ムクムクと再び立ち上がってきてしまった。

「あら」

「ま、まだ少し毒が残っていたみたいですね…ハハ…」

「すみません…」

ええと…その…

もう一回、吸いだして貰え、ますか」

「はい、お任せください」





おお、神よ、  
こんな俺を許してくださーい……







# 聖女様と冒険者共の×日間

～性知識ゼロの聖女に性欲を持て余す旅～

ご覧頂きありがとうございました。  
体験版は以上です。  
続きは製品版でお楽しみください